第2節　常盤構内の試掘調査

1　工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査

1　調査の経過

常盤構内の北西部に位置するグランドの、その南側の空き地にプレハブ研究・実験棟の新営が計画された。グランドは侵食谷を埋積して造成されたもの[1)]であるが、南側の空き地は台地の部分であることが、周辺の地形より判断することができた。埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査の必要があると判断した。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、平成5年7月15・16日に試掘調査を実施した。新営予定建物の範囲に従い、東西29.0m×南北8.0mの4隅に2.0m×2.0mのトレンチを設定したが、地表面に大きなコンクリートの廃材が露出していた南西隅のトレンチでは掘削を行わなかった。調査面積は12.0m²である。

2　調査結果

試掘を行った3地点とも厚さ約10cmの表土層を剥ぐと厚さ約20cmの埋め土層があり、その下には厚さ約10cm程の常盤構内造成以前の旧表土層があった。旧表土層は明褐色粘質土（7.5YR　5／8）で、その上層は炭灰を含んでいた。旧表土層の直下は橙色粘質土（5YR 7／8）の地山である。旧表土層の直下が地山であることが示すように、本調査地は著しい削平を受けており、遺構・遺物は確認されなかった。

［注］

1）河村吉行「山口大学構内の埋蔵文化財の分布」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』X、1992年）

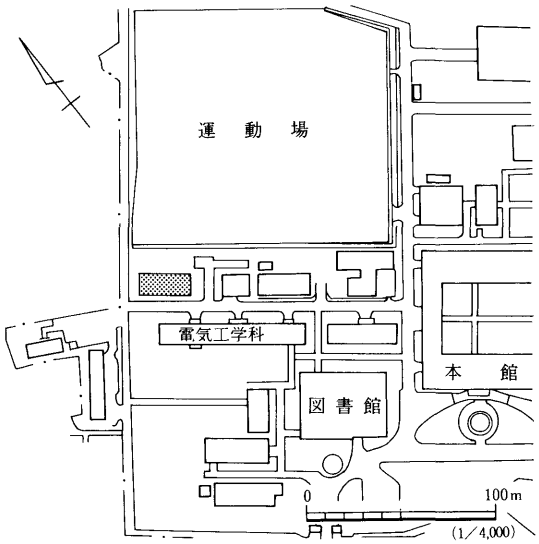

Fig. 31　調査区位置図

2　工学部地域共同研究開発センター新営工事に伴う試掘調査

1　調査の経過

常盤構内の南東部に位置するテニスコートに、地域共同研究開発センター新営が計画された。新営予定地は、北から南に向かって平坦地が４段にわたって造成された常盤構内の１段目にあたる。平坦地１段目の東側は過去に調査事例がなく、埋蔵文化財の有無については不明であった。埋蔵文化財資料館運営委員会は先ず、新営予定地内の埋蔵文化財の分布状況を把握するため、試掘調査を実施することにした。

埋蔵文化財資料館は埋蔵文化財資料館運営委員会の決定を受け、平成５年７月15・16日に試掘調査を実施した。地域共同研究開発センター新営予定の建物範囲は東西18.0ｍ×南北31.0ｍであり、その４隅に2.0ｍ×2.0ｍのトレンチを設定した。調査面積は16.0㎡である。

2　調査結果

試掘を行った4地点とも、マサ土とその下の排水用スミハイが厚さ20㎝ほど敷き詰められていた。その直下は、黄色粘質土（2.5Y　8／8）の地山であった。このテニスコートの東側は崖面であり、一段高くなって国立宇部工業高等専門学校の敷地がある。両者には相当の高低差が認められる。本調査地は調査結果や現地の状況から、常盤構内造成時に平坦地を確保するため、丘陵をかなり削平した部分であることがうかがえた。今回及び過去の調査例[1]から、常盤構内の１段目平坦部分は、旧状をとどめないほどに著しい削平を受けているものと考えられる。１段目平坦部分に関しては、過去に埋蔵文化財があったとしても既に消失しており、調査の必要はないものと判断した。

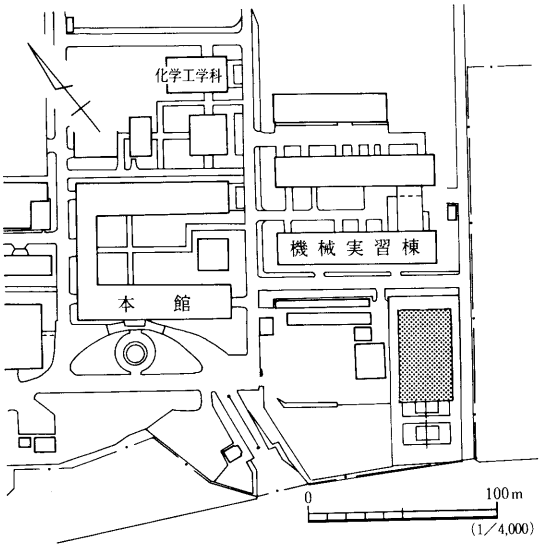

Fig. 32　調査区位置図

［注］

1）山口大学埋蔵文化財資料館「工学部プレハブ研究・実験棟新営に伴う試掘調査」（『山口大学構内遺跡調査研究年報』Ⅻ、1994年）